# 生活&総合navi

vol.78 SEPTEMBER 2020

［特集］

【座談会】
インクルーシブ教育の未来を考える

## みんなが主役になれる学校をつくろう（後編）

［連載］

Belief
村川先生のカリキュラム・マネジメントゼミ
野口先生のアクティブ・ラーニング教室
研究と実践
ご当地情報局
生活・総合への提言
保育所，幼稚園の現場から
生活科を社会科とつなぐ

本資料は，一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り，配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！
日文 検索

新しい生活様式と学び
※このマークが付いている記事は，学校の新しい生活様式と学びをテーマに構成されています。

※本冊子掲載QRコードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
※QRコードは，株式会社デンソーウェーブの登録商標です。

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

新しい生活様式と学び

# 生活科を社会科とつなぐ

## 社会とのつながりが実感でき，つながりによる安心感が得られる活動の工夫を

３か月の休校期間中，子どもたちは，夏休みなど解放を感じる通常の休暇とは異なった状況を過ごしていた。多くの子どもたちは家族と「三密状態」で，身体的にも心理的にも閉塞・孤立を強制された生活をしていた。保護者が収入減などの不安を感じ，それが子どもの心に影を落としてはいないか。保護者が感染を慎（おそ）れて子どもの行動を過剰に規制し，それが子どもの心にストレスを鬱積させてはいないか。保護者たち自身が，社会とのつながりを断ち切られる危惧の中で生活している。保護者の負の感情が，子どもたちの心に閉塞感・孤立感という大きな重荷を負わせている。

再開された学校では，感染防止や学習の遅れを取り戻す対策は必要である。しかし，教師たちが神経質になり，子どもたちに対して指示・命令・規制が多くなってはいけない。子どもたちは，家でうんざりするほど，保護者から指示・命令・規制を受けている。子どもたちは，再開された学校生活に，不安感が払拭され，感情が解放され，ストレスが発散できることを期待している。子どもたちが求めていることは，自分と世界とのつながりの確認である。つながりの中で自分の存在についての安心感を取り戻すことである。

身体的な「ディスタンス」が，心理的な「ディスタンス」になってはいけない。

子どもたちがお互いのつながりを実感できる活動を仕掛けることが必要である。時間数の制約から，「生活」は「音楽」「図工」「体育」などと合科で実施してもよい。子どもたちは，自分の感情や生命力をみんなと全力で表現できる学習活動を求めている。飛沫感染を慎れ，子どもたちに発声を規制してはいけない。例えば，校庭で子どもたちが外向きの輪になり，「コロナウイルスに負けないぞ！　みんなで力を合わせて乗り越えよう」など，大声で叫んではどうだろうか。「病院の職員の皆さん，頑張ってください」などと社会に向けてメッセージを加えるとよい。校庭の外から地域の人たちが拍手で応えてくれるとうれしい。

子どもが社会とのつながりを実感できる活動のしかたを工夫しよう。

子どもたちは，自分の感情や生命力をみんなと全力で表現できる学習活動を求めている。（上巻p.111）

**藤井 千春**
早稲田大学教育・総合科学学術院教授。博士（教育学）。1958年千葉県生まれ。茨城大学助教授などを歴任。ジョン・デューイの哲学と教育学を研究。

**POINT**

1. 再開した学校生活に，子どもはつながりの確認と回復を求めている。
2. 指示・命令・規制的な指導はできる限り避ける。
3. お互いのつながりが実感でき，生命力が引き出される活動を工夫して仕掛ける。

生活&総合navi vol.78
日文教育資料［生活・総合］
令和2年（2020年）9月30日発行
編集・発行人　佐々木秀樹
発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

Cover photo：Konishi Takashi
Design：Kurahashi Junpei（KN.PLANNING）
CD33524

日本文教出版 株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/
大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5　TEL：06-6692-1261　FAX：06-6606-5171
東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16　TEL：03-3389-4611　FAX：03-3389-4618
九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14　TEL：092-531-7696　FAX：092-521-3938
東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B　TEL：052-979-7260　FAX：052-979-7261
北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1　TEL：011-764-1201　FAX：011-764-0690

【座談会】インクルーシブ教育の未来を考える

# みんなが主役になれる学校をつくろう 後編

文／田中洋子　撮影／西田祥子

**今号では、前回に引き続き甲南女子大学において、インクルーシブ教育の研究・実践に取り組む3人の先生方に、学校現場の実情と課題、そしてどの子も取り残さないための英語科の実践例を交え、インクルーシブ教育の望ましい姿を語っていただきます。**

**前編では**

## 「一人も置き去りにしない教育」の実現に向けて

障害のある子，クラスに溶け込めない子，勉強でつまずく子。インクルーシブ教育の本質は，様々な特性をもつ子どもが，誰も置き去りにされない学校，どの子にも居場所のある学校をつくることです。座談会前半では，こうした背景を確認したうえで，石堂先生が小学2年生の授業での実践を紹介。子どもたちにスーパーボールを投入してもらい，授業の理解度を確認する「振り返りボックス」など，わからない子を取りこぼさない工夫や，みんなが参加意識をもてるクラスづくりのヒントを得ました。

一方，研究者として発達障害の子どもの英語指導に取り組む村上先生は，学習や指導の選択肢を教師がたくさんもつことや，教科における子どものつまずき傾向を蓄積し，早期発見，早期対応につなげることが望ましいと語ります。

また，宮村さんは保育園経営の視点から，わずか1歳でも，子どもはみんな特性をもち，その特性を踏まえた保育が重要だと指摘。その実現には，保育士研修や保護者の理解を得ることが重要であることを，事例を交えてお話しくださいました。

村上先生と宮村さんはそれぞれ，自閉症スペクトラムのある子どものお母さんでもあり，その立場からも，示唆に富んだお話を伺うことができました。



Belief　新しい生活様式と学び

タレント
## つるの 剛士
Tsuruno Takeshi

1975年5月26日生まれ。福岡県北九州市出身。「ウルトラマンダイナ」のアスカ隊員役を熱演した後，2008年に“羞恥心”を結成しリーダーとして活躍。一躍時の人として人気を博す一方で将棋（3段）・釣り・楽器・サーフィン・野菜づくりなど趣味も幅広く，好きになったらとことんやらなければ気が済まない多彩な才能の持ち主。二男三女の父親。

# 「共育」と「育自」子どもたちとともに育っていく

### この時期を有意義な時間に

日々忙しくさせてもらっている中で、唯一自分が欲しかった「時間」が皮肉にも今回のコロナ自粛でいただけたということもあり、家族の基盤を改めて考え、築き直した期間でした。

我が家の5人の子どもたちも全員学校が休みになってしまい、毎日家にいた子どもたちとネット動画を使いながら一緒に勉強したり、庭でキャンプしたりして過ごしていました。一方、僕自身は保育士資格、幼稚園教諭の免許の取得に向けての勉強をするために、この4月に通信制の短大へ入学しましたので、日々その勉強に励んでいました。

### 新しい時代を生きる子どもたちのために

AIなどデジタル化がどんどん進んでいく世の中にあって、今まで存在しなかった仕事もたくさん出てくるでしょうし、自らが新しく仕事をつくっていく時代になっていくと考えています。僕は子どもたちが自ら時代に対応し、切り開いていける〝生きる力〟がますます大切になってくると思っています。そう考えると、これまでのような〝受験に重点を置いた勉強〟が子どもたちの将来にとって本当の勉強になるのか……と疑問を感じてしまいます。子どもをもつ親としては、基本的な学習はもちろん大切ですが、これからの学校には既存の教育法だけではなく、個性や可能性を見て伸ばしてあげられる機会をより多く与えてくれる教育を望んでいます。

僕自身は幼少期からの夢を叶えて、現在〝芸能界〟で働かせてもらっています。子どもたちにもぜひ自分の夢を見つけてもらい、将来その夢を叶えて欲しいと願っています。いろいろな機会にふれたり経験をさせたりして、子どもたち一人ひとりの目の輝きや、心の中のうずきに気付いてあげられるよう見ていきたいと思っています。

まさにこの時期、カナダへ留学中の長男の健康や勉強などとても心配していましたが、本人も元気で、勉強の方もカナダではいち早くオンライン授業も始まったと聞き、日本でのオンライン対応などのインフラの遅れが気になりました。

それぞれの国に良い面やそうでない面はありますが、どの国の子どもたちも互いの多様性を認め合い、あたりまえのように自分の故郷が好きになり、誇りをもつことができる。そんな人間に育つような教育をして欲しいと切に願っています。

### 日々ともに育っていく

実際に5人の子どもを育てている日々の中で感じることは、〝教育〟は子どもとともに育つ「共育」であり、〝育児〟は子どもたちから親である自分を育ててもらう、「育自」だということです。それが僕の子育てのモットーになっています。

世界的にも混沌とした時代の中、これから明るい未来をつくってゆく子どもたちの先頭に立って指導している全国の教職員の皆様を、親としても、そして将来保育者を志す学生のひとりとしても応援しています！

# 必要なのは、教科担当も特別支援の知識をもつこと

## 発達差が大きい低学年では、先生たちの協力体制も大切

**石堂**　以前、ある心療内科の先生と話していて、こんな話を聞きました。「授業中じっとしていられない子も、騒ぐ子も、勉強が遅れがちな子も、5年生、6年生になれば、必ず自然と落ち着くよ」というのです。早いか遅いかの違いがあるだけで、子どもはみんな、その子なりに成長していくのですね。

しかし低学年では子どもたちの発達差が大きい分、どの子にも必ず居場所がある環境を用意することや、ちょっとした学習の壁を乗り越えるためのサポートが、極めて重要です。僕の場合、それが低学年を教えたいと思った、理由の一つでもあるのですが。

発達差が大きい低学年の子どもへの対応は、その前段階の保育の時代とも、リンクするところが大きいと思います。宮村さんの「ちゃのま保育園」では、そういう大事な幼児期を預かる保育士さんたちの研修にも、力を入れておられますよね。

**宮村**　保育士さんどうしのコミュニケーションと相互理解を念頭に、オリジナル研修を続けています。一例をあげると、「〇〇先生は、子どもたちにこんなにステキな声がけをしていた」など、互いのよい点を積極的に見つけて、どんどんふせんに書き出していくようなことをします。

「村上先生は、常に周りのことまで注意深く見てくれているので助かります」とか、「石堂先生は、子どもと同じ目線で話すのがすごくいいです」とか（笑）。これを日頃から、保育士さんどうしでやっています。

**石堂**　よいところ探しですね。これをやると、みなさんのチームワークも高まりますか。

**宮村**　もちろんです。同僚の保育士さんが、それぞれどういう思いで保育をしているのか、よく理解できますからね。

ほかに、一般の企業研修でよくやるチームビルディングの研修も取り入れています。大きな円形のロープを地面に置き、指一本を使ってみんなでそれを持ち上げるとか。全員がうまく呼吸をそろえないと、ロープは上手に持ち上がらないのです。特に研修初年度は、チームビルディング研修をガッツリやりました。

**石堂**　小学校にも、支援が必要な子どもは増えています。まだ若くて教員経験が浅い先生が、支援を必要とする子どもと出会ったとき、一人で悩まないようにしてあげたい。だからわれわれも、チームビルディング研修は、上手に取り入れたいところです。

**宮村**　インクルーシブ教育に、先生たちのチームワークは欠かせないと思います。

**石堂**　そう、一人の先生だけで抱え込まないよう、教員がどんどん意見を交換し、互いの経験値を高めて、みんなで子どもを見ていく必要があります。教員が集まって話すだけでも、そのよい機会になりますよね。村上先生は、若い先生たちの悩みを耳にすることはありませんか。

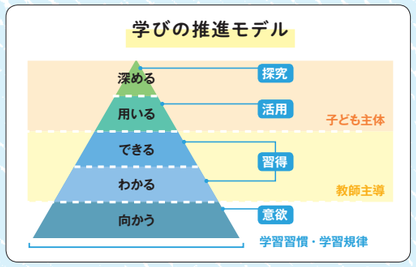
**村上**　若い先生たちはもしかすると、悩むところまでいっていないかもしれません。そもそも子どものつまずきに気が付かないので、本人の中で、問題として意識にのぼってこないのです。子どもやクラスの様子をしっかり観察する目を先生が養って、子どものつまずきに気付けるようになることが、先決ではないかなと思います。気付くからこそ悩み始めるし、悩むから周りの先生に相談するわけですから。

**石堂**　大切なポイントですね。

## 一人ひとりの子どもに合った「わかる」に至る道筋を探そう

**石堂**　教員としての僕は、子どもの気持ちや発達の様子を、常に可視化したいと思っています。「できる」「用いる」「深める」といった学びの段階は、発達の状況や障害の有無、勉強ができる、できないなどとは関係なく、どの子の中にもあるものですから。

**村上**　子どもたちの理解のしかたや度合いは、「わかる」「できる」の段階で、一気に多様性を帯びてきます。だから教師は、子どもたちが「わかる」に至るための道筋を、いくつも用意しておく必要があります。山を登るときのルートが、体力や熟練度や好みに応じて、いくつもあるのと同じです。用意した様々な道筋を、一人ひとりの子どもに合うように、次々と繰り出していくことが、教師には求められていると思うのです。




**石堂**　村上先生ご自身、まさに英語の授業で、「わかる」に至るための道筋を、独自に工夫していらっしゃいますよね。

**村上**　「聞く・話す・書く・読む」という英語の4技能についても、「わかる」に至る道筋はいくつもあります。とは言っても、残念ながら先生たちの手元の選択肢は、まだ非常に少なくて、どうしても英語が苦手になる子どもがポロポロ出てしまいます。

小学校での英語は、3年生で入ってくるのですが、最初、子どもたちはとても喜ぶんですよ。「わあい、英語がしゃべれるようになるんだ！」って。みんな英語が話せるようになると信じて、学習を始めるのです。

その子どもたちが、5、6年生になる頃には、アルファベットが書けずに撃沈していきます。中学に進むと、今度は単語が覚えられない。そして中学1年の2学期には、ほぼついていけない子が決定してしまう。

私たちはここで初心に立ち返り、子どもの興味や関心を生かした英語の授業づくりを考えて、「英語をしゃべれるようになりたい！」という気持ちを、子どもたちに取り戻させなくてはなりません。

**石堂**　新しい学習指導要領では、これからは通常学級でも、またどの教科でも、教員は特別支援の観点からも子どもたちに関わっていくことになります。学習障害のある子どもたちに対しても、「わかる」に至る道筋を、より丁寧に指導していくことが求められますよね。

**村上**　ええ、私の専門の英語科を例にしてお話ししますね。英語の教科担当の教員というのは、通常は英語しか教えられません。クラスにディスレクシア（読み書きが困難な学習障害の一つ）の子どもや、注意集中困難の子どもがいても、英語科の先生は、その子たちにどう接すればいいかわからないのです。結局、手立てがないまま放置して、「お客さん」をつくってしまいます。

一方、特別支援の先生たちは、心理的な観点から、その子がどういう特性をもっているか熟知しています。でも英語を教えるプロではないので、英語科の先生がディスレクシアの子どもを、特別支援の先生に任せきってしまうと、そこに英語指導の空白が生まれてしまうのです。

**宮村**　なるほど。だから、教科の先生と特別支援の先生の、協力体制が欠かせないわけですね。

**村上**　そうなんです。必要なのは、通常学級の教科担当が、特別支援の知識をもつことです。子どもの認知特性を理解し、子どもの発達に応じた指導法を身に付けることができれば、8割、9割の子どもを、確実に見ることができます。もちろん教科担当の先生から、特別支援の先生が学ぶことも多いので、ますます両者の協働が重要になると思います。

## 学習障害があっても楽しめる絵カードを使った英語の実践

**石堂**　今日は村上先生が実際に英語の指導に使っておられる、教具も持って来ていただいています。それについても、説明してもらえますか。

**村上**　実は英語については、学習障害の子どもは諦めたほうがいいとまで、いわれています。特に聞く力が弱い子どもは、英語のリスニングがとても苦手です。そこで、通常の学級でも、遊び感覚で何か工夫できないかと思い、音遊びをやってみようということになりました。

この絵カードは、そのための仕掛けです。小学校英語でも、動物や食べ物の名前など、いろいろな英単語が入ってきます。子どもたちはカードに描かれた絵を見ながら、先生がappleと言ったらappleと発話する。fishと聞こえたらfishと発話する。こうして単語の意味と音とを一致させていきます。

**宮村**　絵が描かれたカードを見ながら、英語の音を聞くことで、学習障害がある子や、聞く力が弱い子にも、学びやすくしているんですね。おもしろそう。

**村上**　一緒にやってみましょうか。小学校3年生、4年生では、「日本語と英語では、音のリズムが違うんだね」という気付きから入ります。たとえばキツネは英語でfox。日本語だと、《フォ・ッ・ク・ス》と、四つの音節ですが、英語のfoxは、たった1音節です。

**宮村**　フォックス、fox……。ほんと、違いますね。

**村上**　foxは1音節、dogも1音節、lionは2音節、chickenも2音節、octopusは3音節です。次は同じ絵カードを使って、音節の神経衰弱に挑戦です。音節の数が同じ絵カードどうしがペアになり

絵の上に付けた印で，英語の音節数が視覚的にもすぐわかる。

子どもの興味や関心を生かした英語の授業づくり

MURAKAMI KAYOKO
**村上 加代子**

**甲南女子大学准教授**

英語教育UD研究学会会長。英語の読み書きに困難のある児童生徒を対象とした「オンラインチャレンジ教室」顧問。著書に『読み書きの苦手な子どもたちへの英単語指導ワーク』（明治図書）など。

先生たちのチームワークは欠かせない

MIYAMURA YUI
**宮村 柚衣**

**ちゃのま保育園代表**

2014年2月，自分の子どもたちが待機児童になったことをきっかけに行政に文句ばかり言ってウジウジしている自分が嫌になり，働きたいお母さんが安心して子どもを預けられる保育所をつくろう！と，2014年10月，準備期間半年でちゃのま保育園を設立。

指導方法は，きっと子どもの数だけある

ISHIDO HIROSHI
**石堂 裕**

**たつの市立新宮小学校 主幹教諭**

学級担任としての「子どもたちと創る」授業づくりは，毎月，県内外からの授業視察を受ける。また校内研修支援コーディネーターとして，授業改善やカリキュラムづくりのサポートも行う。

# 苦手な英語は音節や音素を感覚的にとらえる練習で克服

ますよ。石堂さん、2枚開いてください。

**石堂**　まず1枚目。うん、これはmonkeyで2音節ですね。2枚目は、goatだから1音節だ。

**村上**　音節の数が違うので、ペアになりませんね。次は宮村さん、カードをめくってください。

**宮村**　はい。ええと、これはfrogで1音節です。次はchickenで2音節。あ、さっき石堂先生がめくった、goatのカードを開ければ、frogとgoatで、1音節どうしのペアになりましたね、残念（笑）。

**石堂**　今度は僕ですね。さっき自分が開いたmonkeyと、宮村さんが開けたchickenのカードをめくって、はい、できた。2音節のペアですよ。

**宮村**　この絵カード、動物の絵の上に音節の数が、丸い印で書かれていて、とってもわかりやすい（P・3写真参照）。

子音を入れ替え，音の違いを聞き取ろう。

**村上**　実はこれが、中学校で単音節の単語を読むときにすごく役に立ちます。たとえば中学で出てくるcrocodileという単語ですが、クロコダイルとカタカナで覚えるのではなく、【kráک】【kráک・ə・dàil】と、英語自体の三つの音節で覚えます。

　そのうえで、【kráک】という音はどう書くのかなと考えます。音と文字の関係に慣れておくと、【k】という音は〝c〟とつづり、【r】は〝r〟、【ə】は〝o〟と書くことが、容易に推測できます。同じように、【ə】が〝o〟で、【dàil】は〝dile〟とやっていくと、crocodileのように長い単語でも、音から文字に落としていけるのです。こうして音から英語に接することは、「わかる」に至るとてもよい道筋です。

## 同じ子どもが、すべての教科でつまずくとは限らない

**村上**　もう一つ、別のゲームをやってみましょう。トランプカードを2枚、伏せた状態でテーブルに並べます。2枚のカードは、英語の二つの音（音素）だと思ってくださいね。これから私が英語を発話しますが、途中で二つの音のどちらかを変えますから、変わった音のほうのカードをパッと取ってください。早く気がついて、正しいカードを取った人が勝ちです。ではいきますよ。on、on、ot。どっちが変わった？

**宮村**　2音目だから、右のカード？

**村上**　当たり！　次は、ot、ot、et。

**石堂**　今度ははじめの音が変わったから、左のカードだ。

**村上**　正解です。このゲームでは、自分が取ったトランプの数字の合計が、一番多かった子が優勝です。トランプが少ししか取れなくても、数字の合計が大きければ、勝てる可能性があるので、みんなすごく集中して英語の音を聞きます。

　こと英語に関しては、つまずきやすいのは「聞くこと」だとわかっています。そこをいかに楽しく練習させるかが、工夫のしどころですね。音節や音素が感覚的にとらえられるよう、絵カードやトランプやブロックなどの身近な素材を使って、操作練習をしていくと、気付きの遅い子でもかなり身に付きます。

**石堂**　村上先生の実践は、子どもどうしのゲームとして、横のつながりに広がっていく可能性も感じますね。「クラスの雰囲気が嫌という子が44％もいる」という問題に対抗する、クラスの雰囲気づくりにも、こういう学び方は役立ちそうだな。

　もう一つ、英語では「聞くこと」でつまずきやすいというご指摘は、先生がよくおっしゃる、「教科ごとのつまずきの傾向の蓄積、早期発見」に関連しますか。

**村上**　そうですね。英語はやはり「聞く力」がカギで、中学生の段階で、つまずきが顕著になってきます。小学校低学年でひらがなの特殊音節が苦手な子は、将来、英語が苦手になるかもしれないと、小学校の先生なら推測できるでしょう。でも国語でつまずく子どもが、必ずしも全員、英語でつまずくわけではありません。同じ子どもが、すべての教科でつまずくわけではないのだと、先生が認識しておくと、より広い視野でクラスを見られると思います。

## マル、バツ、点数では測れない自己肯定感を育てる教育とは

**石堂**　教職員のチームワークについて、村上先生はどうお考えですか。

**村上**　先生によって、同じ子どもの違う側面が見えますから、一人ひとりの子どもにどう関わっていくか、複数の先生がともに考えていくことが重要だと思います。

**石堂**　僕の学校には、15分ほどの「朝学習の時間」があります。その中で毎週1回、朝日小学生新聞の「天声こども語」を題材にしたワークシートに、3年生から6年生までの子どもたちが一斉に取り組むのです。

　ふつうこういう活動では、国語が苦手な子はほとんど文章が書けないものですが、このワークシートは少し違います。文章を読んで、「なるほどと思ったことを書こう」といった内容なのです。「ふうん、なるほどね」と思うくらいなら、どの子もできますよね。しかもそこには、間違いや正解もありません。だから自分にも何か書けるという、自信がもてるわけです。

英語の音の変化を素早くとらえ，音素を表すトランプを取り合うゲーム。音に集中することで，英語を聞く耳が育つ。



# 未来に思いを馳せ、その子の〝今〟と向き合う

**村上**　学校での子どもは、とかくマルかバツかで評価されがちですから、自分の思ったことを自由に表現して、それでいいんだよと認められるのは、非常に有意義な体験ですね。そういう経験ができる仕組みを、学校ぐるみで設けることにも、価値があると思います。

**石堂**　僕は生活科の教科書の中で、身近なものを使っておもちゃづくりをする単元が、とても好きなんです。「これを使って、こういうものを、こんなふうにつくりなさい」と、先生が言うのではなくて、それぞれの子どもが自分の好きなものを使い、自分なりに工夫して、おもちゃをつくるんですよ。誰でも何かがつくれて、誰もが自分らしさを出せるわけです。

**村上**　子ども自身の発想から、スタートするのがいいですね。「評価されない」ことも大事ですよ。常に評価されていると、子どもだって委縮するし、大人に対する〝忖度〟が始まったりすることもあります。

**石堂**　「おもちゃづくり」のような活動は、もっと小さい子でも、創造性を刺激されますよね。

**宮村**　小学1年生のうちの息子は、自閉症スペクトラムの発達障害がありますが、彼も幼い頃からものづくりが大好きです。「おもちゃづくり」のような活動でも、率先してワーっとつくって、「こんなのできた！　ぼく一番だね」って。早期療育のおかげで、とても自己肯定感が高い子に育ちました（笑）。

**石堂**　自己肯定感、いわゆる自尊心ですよね。村上先生、今どきの子どもの自尊心というのは、中学・高校ではどんなふうですか。

**村上**　小学校の高学年くらいになってくると、他人と自分を比べて、自信をなくすことがあります。さらに中学校では、定期テストの評価がより視覚化され、順位づけも始まりますから、そこで他者と自分を常に比較していると、自分ができないことにばかり目がいきます。テストの結果だけが、自己肯定感や自尊心のよりどころになり、テストでの失敗がきっかけで、あらゆることに自信を失ってしまうこともあります。こうしたケースは中学校の段階で、最もシビアに出てくるように思います。

## インクルーシブ教育の原点は、「みんな違ってあたりまえ」

**石堂**　お二人の話を伺いながら、小学校の学びの大切さを再認識しましたよ。

**村上**　私は学習障害のある子どもに関わることが多いのですが、インクルーシブ教育においても、もちろん学力は伸ばしていかなければなりません。でも、「人が点数で評価されるのは、学校に行っている間だけだよ」と、ことあるごとに子どもたちに話しています。「学校の外では、自分の個性で勝負していくんだよ。だからあなた自身が、本当にやりたいと思うことを、大事にしようね」と。その子が将来、社会のどこでイキイキ活動していけるか。それを先生が一緒に見つけてあげられたら、その子の一生の宝物になるかもしれませんよね。

**宮村**　私がずっと大切に思っているのは、「あるがままの子どもを受け止める」ということです。小学校時代に、何かの分野でわが子の力を伸ばしてほしいかといえば、一人の親としては、特に何も見つからなくてもかまいません。それよりも、子どもがその時その時に感じたことや、やったことを、「ああ、そうなんだね」と、先生に受け止めていただきたい。子どもにとってはそれだけで、安心できる居場所ができると思うからです。

**石堂**　子どもをしっかり受け止める、未来に思いを馳せながら、その子の〝今〟に関わっていく。難しいことですが、子どもたちの多様性が広がるなか、どちらも教員に欠かせない資質です。インクルーシブ教育に、たった一つの「正解」など、ないのかもしれません。その子に向いた指導方法は、きっと子どもの数だけあるのです。先生たちみんなで知恵を絞れば、必ずよりよい方法が見つかるはずです。

**宮村**　すべての子どもに居場所がある学校、みんなが主役になれる学校をつくるための、それが第一歩だという気がしますね。

**村上**　勉強が苦手な子も、得意な子も、活発な子も引っ込み思案も、人より少しゆっくり育つ子も、様々な障害のある子も、みんな違ってあたりまえ。インクルーシブ教育の原点です。

**石堂**　まさに、「みんな違って、みんないい」ですね。インクルーシブの未来は、同じではないことが普通の世界。低学年の子どもたちは、先生の背中を見て反応しますから、まず先生自身が、「みんな違ってあたりまえ」を心に刻み、子どもたちと向き合っていきたいですね。僕もこのインクルーシブ教育の視点を、常に自分の引き出しに入れておこうと思います。長時間にわたり、有意義なお話をありがとうございました。

三者三様の立場から，個性を受け止め，評価し，伸ばす教育の意義が語られた。

座談会・前編が読める
『生活&総合navi-vol.77』はこちら▶

Active learning class

## 野口先生のアクティブ・ラーニング教室

**野口 徹**

山形大学教授。専門は生活科・総合的な学習。著書に『子どものくらしを支える教師と子どもの関係づくり』（ぎょうせい，共編著）など。

### 「新しいくらし」をつくり出す生活科・総合的な学習の時間の学び

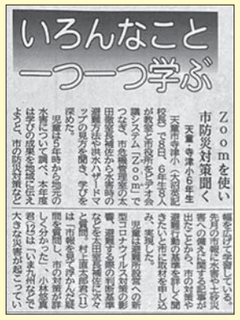
新しい生活様式と学び

2020年の春に起こった様々な状況は，私たちの中に長い期間刻まれることになるでしょう。新型コロナウイルスの世界的な感染拡大による社会における憂慮は，学校教育をも大きな転換点に立たせることとなりました。３か月にもわたる臨時休校措置が採られたことは，自宅に留まることを強いられた子どもたちはもちろんのこと，そうした子どもたちを支えようと努力された学校現場の先生方，保護者にも大きな負担となったことと思います。誰もが初体験となる「大きな壁」に耐えて我慢する日々が続きました。6月ごろから感染状況に一定程度の落ち着きが見られたことから全国各地で学校が再開され，ようやく学校に子どもたちの姿が戻ってくるようになりました。もちろん，関係各位の細部にまでわたる配慮と様々な心づくしによってこれらが成り立っているのだと思います。

今回の新型コロナウイルスがわれわれに見せつけたのは，学校という空間が子どもたちにとって極めて重要であることと，これが社会システムに対しても大きな意味を有していたことが確認されたこと，ではないでしょうか。学校が再開された際にも，学校内での感染が起きないように注意しながら，子どもたちの学びをいかに進めていくか，ということが最大の話題となっています。第二波，第三波が起こる可能性についても取りざたされていますが，再度の長期の休校はなんとか避けたいところです。これらを総合的に考えたときに，私たちの「くらし」が以前のようなスタイルに戻ることは相当に難しくなったことを実感せずにはいられません。例えば，「新しい生活様式」が政府から示されています。しかし，これらはあくまでも安全確保の「目標」が示されているのであって，私たちの新しい「くらし」を具体的にイメージするには至らないようです。このような状況下では，私たちは過去の姿をノスタルジックに振り返るのではなく，新たな有り様を考察しなくてはなりません。つまり，新型コロナウイルスは，私たち一人ひとりに自ら「新しいくらし」をつくり出すことを可能とする資質・能力を求めている，と言えるのです。ここで求められるのは，安全・安心で楽しい「くらし」を自らの力で適切に考え，判断して選択し，協働的に行動できる資質・能力です。これらを子どもたちに育成することが喫緊の課題なのです。

このような課題について考えたときに，「新しい生活様式」の学校教育において最もそれに資するのが実は「生活科・総合的な学習の時間」であることを確認しておく必要があります。「自分のくらしをつくる力を育てる」ことこそが，生活科・総合的な学習の時間の究極の目標であるからです。例えば，学習指導要領の総合的な学習の時間の目標には，「探究的な見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とあります。この目標の「探究的な見方・考え方」について中央教育審議会の答申では，「各教科等における見方・考え方を総合的に活用して，広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え，実社会や実生活の文脈や自己の生き方と関連付けて問い続けること」と示しています。言うなれば，学校の様々な学びを総合的に活用して実社会や実生活で起きている事象を捉え，自分のくらしと結び付けて問題解決を行うこと。これを意味しているのです。つまり，「新しいくらし」をつくり出す資質・能力を子どもに最優先で育成しなくてはならないこれからの学校は，生活科・総合的な学習の時間こそ最重点に取り組んでいく必要があるのです。

では，新型コロナウイルスを想定した上で，これからの生活科・総合的な学習の時間では，どのような学習を行うことがより適しているのでしょうか。このことのヒントになりそうな事例を山形県で見つけることができました。それは2020年７月９日付の山形新聞の記事です。ここには，天童市立寺津小学校６年生がビデオ会議システムであるZoomを活用して，天童市役所の危機管理室の方にインタビューを行っていることが記されていました。６年生は以前から地域の水害について問題意識を抱いており，インタビューの目的は，もしこの地域で水害が発生したときの避難方法やハザードマップの見方を知ることでした。また，避難所が開設されたときの新型コロナウイルスのあるべき対策などのかなり専門的な内容を担当者から聞き出すことでした。そうです。寺津小学校の子どもは，休校の時期に身に付けた遠隔での授業の方法であったビデオ会議システムを自らの生活の問題解決のために活用しているのです。それも「新しいくらし」を模索していくための一つの有効な手段として。市役所の方など外部の方と直接会わずとも必要な情報を集めることはできます。新型コロナウイルスによる経験を基にして新たな問題解決の学習を行うこと。ここにこれからの学校のあるべき姿が見えてくることと思います。



いろんなこと一つ一つ学ぶ

Zoomを使い市防災対策聞く

天童・寺津小6年生

天童市寺津小（大沼記校長）で8日，6年生8人が教室で市役所をテーマにしたビデオ会議システム「Zoom」で講つなぎ，市危機管理室の大田浩補佐から市内のハザードマップの見方などを聞き，学んだ。

児童は5班に分かれ，市役所から2つの質問を用意し，市の対策が詳しくわかった。小林結貴君は「いまは何かなどと大きな災害が起こっていい

寺津小学校の学習の様子を知らせる山形新聞の記事



Curriculum management seminar

## 村川先生のカリキュラム・マネジメントゼミ

**村川 雅弘**

甲南女子大学人間科学部教授。専門は教育工学，カリキュラム開発，生活科・総合的な学習。近著に『カリキュラム・マネジメント　実現への戦略と実践』（ぎょうせい）がある。

### 国を挙げての新型コロナ対応のカリキュラム・マネジメント

新しい生活様式と学び

**[ 現場のニーズにいかにスピード感を持って応えるか ]**

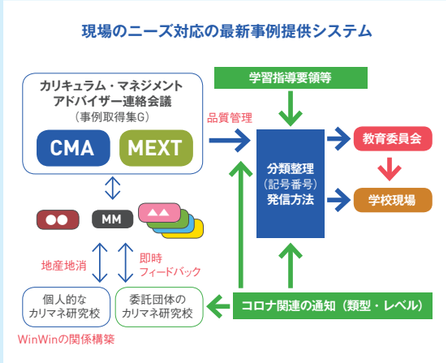
一部の感染症学者を除く誰もが予想しなかった災禍が地球規模で起こった。今夏開催の東京オリ・パラも1年延期となり，地球全体で収束の目途はたたず，来年開催も危ぶまれている。

「先行き不透明な次代を生き抜くための資質・能力」の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」の実現と教科横断的な教育課程編成を重視する「カリキュラム・マネジメント」の充実などを掲げた新教育課程を本格的にスタートする矢先にコロナ禍は起こった。突然の臨時休業要請以降，学校現場は，濁流の中を管理職のリーダーシップの下，奔走の日々が続いている。感染症拡大の実態→政府→文部科学省→地方教育行政→学校現場という構図の中で，学校のカリキュラム・マネジメントが今こそ問われている。

文部科学省は感染症対策，臨時休業対策，感染回避と学習保障の両立などに関して，省内の部局課を超えて通知を発出してきた。「べき」論にとどまらず具体的な手立てや情報を発信している。それが各地方教育行政及び各学校の判断基準・行動指針となっている。

文部科学省は6月に「新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の学習保障に向けたカリキュラム・マネジメントアドバイザー連絡会議」を立ち上げた。主に「教育課程運営上の相談に対する指導・助言」と「新型コロナ感染症対策の側面からのカリキュラム・マネジメントにかかわる事例の収集・整理」を行う。筆者は事例収集担当である。

仕組みをポンチ絵に表してみた（右図参照）。まず，左下の「〇〇」「△△」「MM（筆者）」が事例収集担当のカリキュラム・マネジメントアドバイザー（CMA）である。各々が教育委員会や学校現場を有している。筆者も個人的に研究指導を行っている学校と文部科学省委嘱の研究校から最新の好事例を提供してもらい，ストックしている。その事例をアドバイザーがカリキュラム・マネジメントの視点から意味付け・価値付けを行い，文部科学省内（MEXT）の確認を経たのち，事例をカリキュラム・マネジメントの視点や感染レベルに応じて整理・保存しておき，教育委員会や学校現場に様々な方法で発信される。文部科学省のHPを常にチェックしていただきたい。




**MANAGEMENT POINT**　**コロナ禍における国レベルのカリマネのポイント**

- ■ 文科省の通知を踏まえ，対応の基本的な方針・方向性をぶらさない
- ■ 地域や学校の実態に応じ，カリキュラム・マネジメントを展開する
- ■「借り（カリ）て真似（マネ）る」の精神で，好事例を自校化する

文部科学省は対応の先頭を走っているものの，このような事態は全く初めてである。まさに「先行き不透明な時代」の真っただ中にいる。感染症対策はその道の専門家の知見を踏まえて進めているが，学びの保障に関しては学校現場こそが専門家集団である。日々の工夫や努力の成果を提供していただき，学校現場，地方教育行政，文部科学省，そして研究機関が協働してこの難局を乗り越えることが求められている。

新学習指導要領本格実施に水を差すような形となったかもしれないが，筆者はむしろその逆ととらえている。「先行き不透明な次代を生き抜くとともに多様な他者と協働的に新たなものを創出するための資質・能力」の育成の必要性がクローズアップされた。環境や福祉・健康，国際理解，防災などの現代的諸課題に新型コロナウイルス感染や医療，観光，経済などが加わった。感染拡大や臨時休業期間における学びの質量の差が地域間格差，学校間格差，そして個人間の差を生み出し，その解決には各学校のカリキュラム・マネジメントの充実が求められている。また，国際的に見て低調だったICT環境の整備と活用が飛躍的に前進し，長年の課題「働き方改革」にも一筋の光明が見えてきた。前向きにとらえよう。知恵を結集して「ピンチをチャンスに」していきたい。

現状では，ソーシャルディスタンスなど，様々な対応が必要になることが考えられますが，このコーナーでは，少しでも早い収束を願い，2019年秋の実践から，子どもたちの生き生きとした姿と学びの本質をお届けします。

校庭や山で，思う存分秋とふれあい，子どもそれぞれが「秋って〇〇だな」「〇〇をしてみたい」といった思いや願いをもった。

# 生活科の現場から

## 思いをもとに対象と関わり続け，気付きの質を高める子どもの育成

**[1年]**「あきとあそぼう」2019年秋の実践より

和美智教（岩手県盛岡市立緑が丘小学校）

### 1 はじめに

生活科では、子どもが、思いをもとに具体的な活動や体験をすることを通して、身体全体で、様々な感覚を豊かにはたらかせてとらえた対象について、比較したり、分類したり、関連付けたりするなどして解釈し、把握することが大事にされている。また、子どもが自ら試したり、見通しをもったり、工夫したりなどして新たな活動や行動をつくり出していくことを通して、自分自身や自分の生活について考え、そこに新たな気付きを生み出すことが期待されている。すなわち、思いや願いをもとに対象と関わり続け、気付きの質を高めていくことが重要である。これらのことから、本主題を設定した。

自分の思いを達成するために，友だちと関わりながら，試したり工夫したりして活動した。

### 2 研究の手立て

❶ 対象と関わる機会を多く設定

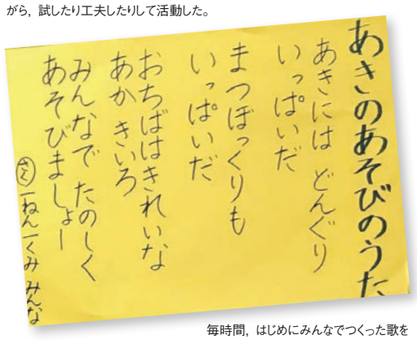
対象と十分に関わることができるように、時間の確保と場の設定の工夫をする。そのことにより、子ども自身が、「〜したい」という思いをもち、自ら課題を解決することができるようにしていく。

❷ 思いをもとにした繰り返しの活動

子どもの思いや願いがつながり、活動が発展するように単元を構成していく。そのことにより、子どもが、思いをもとに対象と繰り返し関わる中で、気付きの質を高めることができるようにしていく。

❸ 活動と自分についての振り返り

単元の区切りや単元末に、それまでの活動と自分の生活を見つめる振り返りを行う。そのことにより、対象と自分との関係を明らかにしたり、自分の成長を自覚したりすることができるようにする。




毎時間，はじめにみんなでつくった歌を歌ってから楽しく活動した。

### 3 研究の実際

❶ 秋の生き物とふれあう活動

まず、単元の「出合う段階」では、秋の植物や生き物を十分に観察したり、それらとふれあったりすることができる活動を位置付けた。

- 校庭での観察
- 公園や山での観察（遊び）
- 夏と秋の比較（ベン図の活用）

これらの活動を通して、「秋で遊びたい」「夏の遊びのようにみんなで何かしたい」という思いをもった。そして、それらの思いをもとに、単元の課題「あきのはやみを使って、つくってたのしくあそぼう」を設定した。

子どもたちは、秋と十分にふれあうことで、思いを高めることができた。

❷ 思いをもとにした秋の遊び

子どもの「つくりたい」「遊びたい」「友だちと楽しみたい」という思いをもとに繰り返し、秋の遊びをした。

- 個人でのやりたい遊び
- グループでの遊び
- お祭り屋台を開いての遊び

前時の振り返りでの思いをもとに、課題を設定し、見通しをもって活動した。そのことにより、個人からグループ、グループから学級みんなでのお祭り屋台、というように連続・発展的に活動をすることができた。また、友だちと関わることにより、遊びを比べたり、工夫したりすることができた。さらに、教師の問い返しにより、活動のよさと対象や友だちとの関わりに気付くことができた。

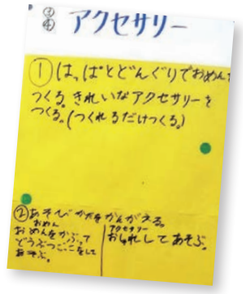
**単元計画**

| | |
|---|---|
| 目標 | 身近な秋の葉や実を利用して遊ぶ活動を通して，その遊びに関心をもち，自分の考えた遊びを試したり，遊びを工夫したりするとともに，できるようになる面白さや友だちと関わって遊ぶ楽しさに気付くことができる。 |
| 主な学習活動 | ❶校庭で，秋の草花や樹木，生き物の様子を観察し，夏の生き物の様子と比べる。<br>❷動物公園や黒岩山で，秋探しをする。<br>❸生活科の時間に，やってみたいことを出し合い，これからの活動を決める。<br>❹一人ひとりが，自分で考えた木の葉と実を使った秋の遊びを楽しむ。<br>❺子どもの思いをもとに話し合い，次の活動を決定する。<br>❻秋の遊びがもっと楽しくなるための方法を工夫したり，友だちと関わったりしながら遊ぶ。<br>❼お祭り屋台を開いて，みんなで遊ぶ。<br>❽おだんごチャートを用いて，これまでの活動を振り返る。<br>❾できるようになったこと，友だちと関わったこと，その理由を話し合う。 |

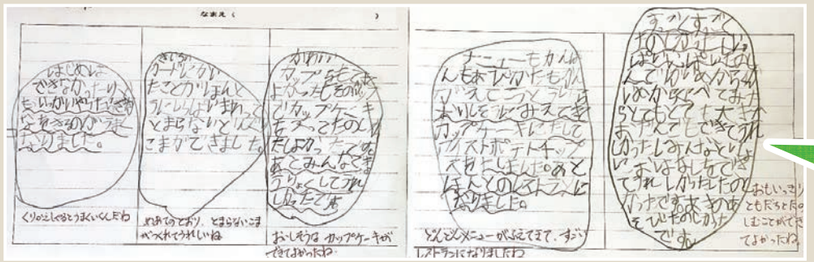
おだんごチャート型の掲示

最初

最後




グループの思いを表示し支援した。



子どもが書いたおだんごチャート

**おだんごチャート**

満足度をおだんごの大きさで表し，丸を描く。その中に，振り返りを書き，毎時間積み重ねていく。

❷ おだんごチャートでの振り返り

本単元では、活動の満足度と振り返りを記録するため、また活動や満足度の変化を可視化するために、「おだんごチャート」を活用した。子どもたちは一人ひとり「おだんごチャート」を使って、各時間の終末に振り返りを行った。その中で、「なぜ、おだんごが大きくなったのか」「どうして、楽しいお祭りができたのか」などと、教師が発問した。

活動を通して、おだんごチャートの大きさの変化に着目しながら話し合いをすることで、楽しさが増したり、できるようになったことが増えたりしたことに気付くことができた。そして、その楽しさは、つくって遊ぶ活動を繰り返す中で、対象だけでなく友だちとの関わりが増えたことによるものだということにも気付くことができた。

### 4 おわりに

対象と十分に関わることで、子どもは思いを高めることができるということがわかった。また、思いをもとに活動を連続・発展的に行い、教師が問い返しをすることで、子どもは、気付きの質を深めていくことがわかった。さらに、振り返りを行うことで、子ども自身が気付きを自覚することもわかった。

# さとえ式リモート授業の現場から

新しい生活様式と学び

## 1日6時間のリモート授業

### ～その実現とこれからの授業づくり～

山中昭岳（さとえ学園小学校）

### 1 教育のアジャイル化

「学びを止めない！」

突然の休校が決まり、全教職員で共有した目的である。子どもたちの学習の確保、何よりも突然はなれてしまった子どもたちと先生、子どもたちどうしをつなぎ続けること、これがリモート授業の土台にある。そして休校期間中、1日6時間、全教科の授業が実施できている。

このような取り組みができたキーワードは，アジャイル化，である。

アジャイルとは、「すばやい」という意味の英単語で、仕様や設計の変更があることを前提に開発を進めていき、徐々にすり合わせや検証を重ねていくというアプローチのソフトウェア開発手法である。その手法を用いて以下のことを重視し、取り組みをすすめてきた。

【図1】教育のアジャイル化のプロセス

- 先を想定する
  中期、長期目標を設定する
- スピード重視
  初めから完璧をめざすのではなく最低限からスタートし、できる一歩から始めて修正していく
- 学び続ける
  他分野の視点を取り入れる（経営学、システム開発　など）
- チームづくり
  主体的に動く学校へ

### 2 さとえ式リモート授業

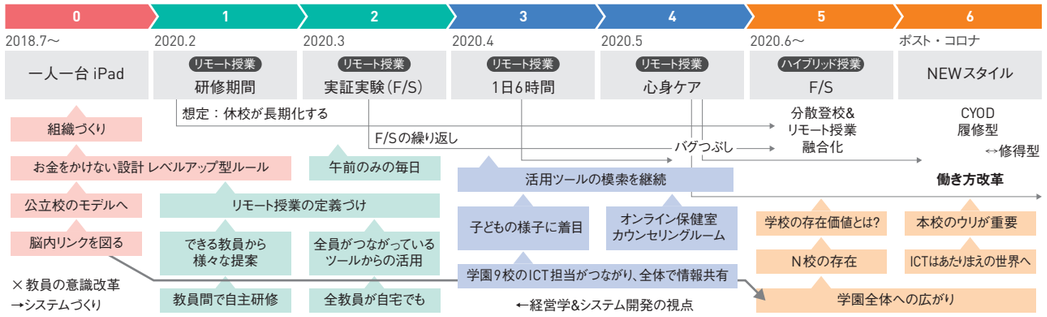
2月に4月以降（おそらく長期になる）の休校を想定していた本校は、3月よりリモート授業での実証実験を開始し、4月より1日6時間（週30時間）、全教科でのリモート授業を実施してきた。その結果、教員もリモートワークでの授業が可能となった。

【図2】リモート授業のシステム環境概要図

本校の「リモート授業」は、「自宅で学校と同様の内容の学習ができる」と定義づけている。それには、オンラインでのオンタイムのやりとりが必須なのではない。オンタイムでなくても、全教科毎時間、その時間内にできる課題を設定し、それらの課題を達成すれば、学校で授業を受けるのと同様の学習ができるということがポイントである。

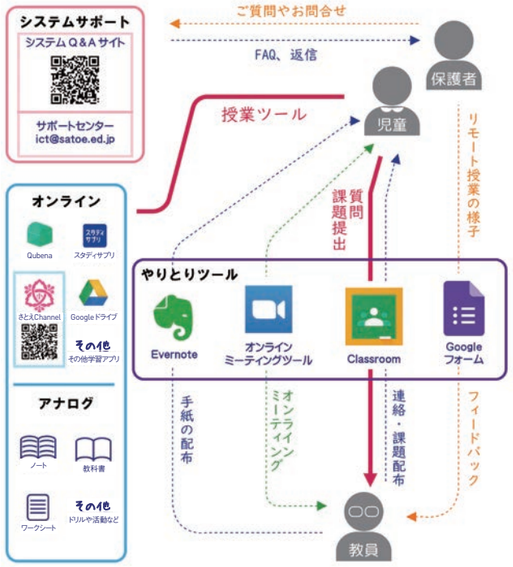
システムづくりで大切にしたのは、学校と子どもが必ずつながっているツールを中心にすること。この図でいうと、Ｇｏｏｇｌｅの「Ｃｌａｓｓｒｏｏｍ（クラス単位で運営や管理ができるツール）」がそれにあたる。本校では「Ｃｌａｓｓｒｏｏｍ」を以前より連絡帳の代わりとしてずっと活用してきたため、子どもたちにとって、このツールでのやりとりはあたりまえにできることの一つであった。それに加えて、学校と同様の学びの形を選択できるように様々なツールを準備した。【表1】

【図1】教育のアジャイル化のプロセス




CYOD（Choose Your Own Device）：企業や組織が数種類のデバイスを用意し，各自がそこから選んで使用すること。

【図2】リモート授業のシステム環境概要図






### 3 リモート授業実現を支えるひと・もの・こと

【図3】さとえ学園小学校リモート授業の流れ

【表1】

| | | |
|---|---|---|
| インプット型 | 一斉授業 | 動画配信（さとえChannel：クローズドな環境で本校の教員が作成する授業動画が見られるサイト） |
| インタラクティブ型 | グループ学習 | オンラインミーティング（Zoom：映像や音声を使ったWeb会議ツール） |
| アウトプット型 | 作品づくり・発表 | プレゼンや作品提出（Googleドライブ：インターネット上にファイルを保管できるサービス，Classroom：クラス単位で運営や管理ができるツール） |
| プロジェクト型 | 自律学習 | 長期間，自分たちで学びを進める（ポートフォリオとしてEvernote：個人用のドキュメントを管理できるツール） |

一人一台のｉＰａｄを、学校保管ではなく、常に子どもたちが持ち、授業での活用はもちろんのこと、家庭学習や連絡ツールとして、毎日使っていた。

もちろん先生たちも一人一台ｉＰａｄを持ち、授業での活用はもちろんのこと、連絡ツールやペーパーレス化に役立てていた。そんな中での突然の休校であったため、いつものｉＰａｄ活用の延長でこのリモート授業をスタートすることができた。

このような対応ができた裏側には、先生たちのチームワークも大きな要因の一つであった。安倍総理からの休校要請の発言（2月27日）からすぐに、退勤後ではあったが、先生たちに休校に向けての課題の洗い出しの依頼があった。その対応として、本校のＩＣＴメンバーがすぐに「休校対策Ｔｒｅｌｌｏ（タスク管理ツール）」を立ち上げ、その瞬間、退勤後にもかかわらずオンラインですべての学年が課題を洗い出すことができ、翌日の朝からスムーズに休校対応ができたのである。オンラインでつながっていることが「ふつう」だったからこそできる緊急の対応であり、それが本校の働き方改革へもつながっている。ＧＩＧＡスクール構想の真の実現は、この取り組みをわざわざこのように取り上げなくてもよいくらい「ふつうのこと」になることだと考える。

### 4 ポスト・コロナの授業づくり

今、一斉授業ではなく、小グループなどでの協働的な学びを重視する流れがあるが、一斉授業が悪いということではない。クラスを構成する子どもたちの学力差が二極化している現状で、中間層に合わせた一斉授業は成立しなくなってきているということだ。

そこで、これからの授業のあり方を考えると、これまで同様の教育、授業ではなく、オンラインと融合させた学校の学びとして進化させていく必要がある。

例えば、クラスを上位層、中位層、下位層の三つに分け、同じ教室で同じ課題をやりながらも、それぞれのやり方で習得していくという方法がある。上位の子たちは自律型のオンライン学習でどんどん自ら進んでいき、下位の子たちには教師が直接関わり指導する。そして中位の子たちにはオンライン上にある授業動画などを活用して教師はファシリテートしながら授業を進めていく。さらに進むと、上位の子たちは自らの学習の定着を図るために教える側にたって他の子たちと学び合いをするようになる。「教える」ことは一番の学びであり、ひいてはすべての子どもたちによい効果をもたらす。今までは教師から習得のしかたを伝えるしかなかったのだが、この形態では様々な子たちの習得のしかたを知ることができ、自分に合った学び方を提示することもできる。

このように、オンラインを取り入れていくことは、教師のあり方を含めて授業デザインを進化させるということである。今までやってきたことを否定するのではなく、アップデートさせていくという発想で、新しい形を勇気をもってつくっていくことが肝要になるだろう。

【図3】さとえ学園小学校 リモート授業の流れ

**一日の流れ**

**【事前に】**
連絡帳として毎日活用しているClassroomを基本のツールとして，時間割やその日にする課題，手紙など，必要なものはすべてオンラインで子どもたちのiPadへ送られる。

**【授業では】**
子どもたちはClassroomに届いた情報をもとに，学習を行う。
まずは，Zoom（映像や音声を使ったWeb会議ツール）を活用して朝の会。先生とみんなの顔を見ながら学校と同様の朝の会を行う。
その後は，ほぼ全教科で課題が提示され，ときにはZoomを活用しながら一緒に身体を動かしたり，いつも宿題などで活用していたQubena（AI型タブレット教材）やスタディサプリで学習を進めたり，作品やデータづくりをしてGoogleドライブ（ファイル保管サービス）に保存して提出したりする。普段授業でやっていたことがそのまま家でもできている。

この写真は，1年生の生活科のワンシーン。クラスで飼っていたクサガメとも突然のお別れだったので，毎日世話をしていた子どもたちに元気な様子を見せている。

＼山中先生の実践を公開中！／
ブログ「生き活きうぃーくる」

# 「ご当地情報局」

今回は、兵庫県姫路市のご当地キャラ「しろまるひめ」と、独特の食べ方をする郷土の味「姫路おでん」をピックアップ！ 世界遺産「姫路城」で世界的に有名な姫路の魅力をご紹介します。



## ご当地キャラ Character

姫路市
キャラクター

# しろまるひめ

トレードマークは，姫路城の帽子，桜の髪飾りです♪

## プロフィール

チャームポイントは，色白のもち肌。

| | |
|---|---|
| 名前 | 姫路市キャラクター しろまるひめ |
| 誕生日 | 4月6日（しろの日） |
| 出身地 | 姫路市本町68番地　姫路城内（西の丸で産湯を使いました） |
| 所属 | 姫路市 |
| 性格 | 身体と同じく柔軟で優しい |
| 好きな食べ物 | 和菓子（特にお団子には目がない）ただし現在ダイエット中 |
| 楽しみ | 城内・城下のお散歩、好古園でお茶すること |

## 名前の由来

姫路市制120周年，姫路城築城400周年，姫路港開港50周年を記念し，市民が「ふるさと・ひめじ」をイメージできるキャラクターを公募したところ，全国から1,598点の力作が寄せられ，厳正な審査の結果，「しろまるひめ」に決定しました。
姫路城は白漆喰で塗られた城壁の美しさから「白鷺城」とも呼ばれていて，その「白鷺城」を象徴する真っ白な肌の，可愛い女の子です。

## 子どもたち，先生へのメッセージ

姫路市には姫路城だけでなく，映画のロケ地として有名な書写山圓教寺や好古園があります。また，家島諸島では新鮮な魚介類が取れ漁業体験もできますよ♪ ぜひ姫路市に遊びに来てね。

## 主な活動

・月に3回姫路城前または姫路駅前の観光案内所にお散歩に出かけています。
・全国各地に行き，姫路市のPR活動をしています。

写真提供：姫路フィルムコミッション



## ご当地料理 Dishes

姫路のご当地料理

# 姫路おでん

写真提供：姫路おでん協同組合

姫路おでんキャラクターの「しょうちゃん」

## 姫路おでんとは…

姫路には関東煮と呼ばれる濃く甘い味付けのおでんと，専門店で提供される薄味のおでんの2種が存在しますが，生姜醤油で食べるおでんをすべて「姫路おでん」と呼んでいます。姫路市にはこの「姫路おでん」を提供するお店が数多くあります。

その発祥は，姫路市の隣，龍野市（現：たつの市）にかけて古くから（現在も）醤油の産地であったこと。また，姫路市白浜町が昭和の初め頃生姜の産地だったことで，それぞれの地場産業である醤油と生姜をブレンドするとおいしくなることを発見し，それが食習慣になったのではないかと考えられています。

なお，生姜醤油をおでんにかける食べ方は，姫路では家庭でも一般的だったため，特に名称はありませんでしたが，2006年6月に姫路の食でまちおこしを考えるグループが「姫路おでん」と命名しました。

これまで，姫路おでんキャラクター「しょうちゃん」の考案，JR姫路駅内にアンテナショップの開設，姫路おでんのアイドル♪ちびっこ「姫路おでんきレディ」の結成など，普及に努めてきました。姫路おでん協同組合では，早く新型コロナが収束して，またこのような活動ができれば，と願っています。

## 特徴とつくり方

- 関東煮のダシを切って生姜醤油を上からかけていましたが，その後，関西風の薄味（飲めるダシ）のおでんの登場とともに，刺身のように小皿に入れた生姜醤油につけて食べる人も多くなってきました。
- 生姜醤油は，濃口（薄口）醤油に土生姜をすったものをお好みの量入れてつくります。そこにみりんを少量加えたり，日本酒を少し入れてひと煮立ちさせたり，おでんのダシを少し生姜醤油にまぜたりと，それぞれの家庭によってお好みでアレンジして完成です。

生姜醤油と聞くと「醤油で煮込んだおでんに生姜醤油をつけるなんて，なんだか辛そう」というイメージがあると思いますが，意外にさっぱりとおいしく食べることができ，子どもたちにも大人気です。

# 生活・総合への提言

## Withコロナでの学習づくり 三つのポイント

新しい生活様式と学び

兵庫県たつの市立新宮小学校
主幹教諭
石堂 裕

### Withコロナでの学習で重視しておきたいこと

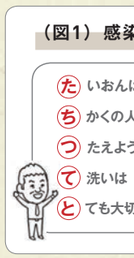
本校では、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための臨時休業が解除となり、6月1日から学校が再開しました。2020年度は、小学校にとって、新学習指導要領完全実施の年です。さらに学校の新しい生活様式（文科省）を取り入れた「Withコロナ」での授業を考えると、日々の授業での方向性は

- 主体的な学びと主体的な学習習慣づくり
- 個別最適化学習の推進

の二つを重視することが大切であると考えます。図1に示すマスクの着用や手洗いなどの感染防止対策や熱中症対策が定着してくると、これらを継続しつつ、日々の授業改善が求められます。目指すべき二つの視点をおさえた子どもたちの主体的・対話的で深い学びを生み出すための学習づくりについて、理解しておきたい三つのポイントを紹介します。

（図1）感染症拡大防止の約束カード

- た いおんは 毎日チェック
- ち かくの人と 話す時は マスク
- つ たえよう 風邪かも おうちのひとや先生に
- て 洗いは せっけんで
- と ても大切 顔をさわらないこと



### ポイント① 家庭での自主学習がスムーズに行えるように

多くの学校では、臨時休業中に、子どもたちが主体的に家庭学習を進めることができるように、手引きを作成したり、学習プリントを工夫したりされたと思います。本校でも、週ごとに家庭学習の目的を変えながら学習課題を提示していました。それをサポートするために発行したのが、「みつわっ子まなブック」（画像1）です。教員が示したい内容が多くなれば分厚くなり、子どもたちには読んでもらえません。そこで、A4判6枚の冊子に仕上げ、すぐに読み切ることができるよう留意しました。ただし、子どもたちの主体的な学びや学習習慣づくりに役立てられるように、漢字や計算などのドリルの進め方はもちろん、学習計画の立て方や、すべての教科と総合的な学習の時間での自主学習の進め方のポイントを具体的に示しています。インターネットで詳しく調べる際のおすすめサイトやレポートの書き方などが明記してあることも特長の一つです。

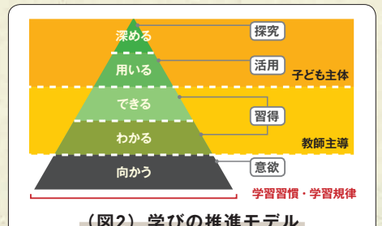
ここで大切なことは、この冊子の利用を臨時休業期間のみで終わらせないことです。そこで、土日の家庭学習にこれを用いた自主学習を進めてもらうようにしています。内容は自ら問いをつくり、問題解決の過程をレポート（A4判1枚）にまとめるというものです。例えば、写真1のA児（3年生）のレポートの場合、逆上がりを取り上げています。内容を見ると、前日の金曜日の体育で技が習得できなかったことが影響しています。そのため、土日の間に、授業中に視聴していたNHK for Schoolのサイトを再度見直し、自分自身のできないポイントと関連付けたレポートに仕上げたのです。その結果、次の体育の時間での技の習得につながりました。これは、図2「学びの推進モデル」のうち、レポートが知識としての「わかる段階」と「できる段階」をスムーズに結んだことを示しています。

このように、休日の家庭学習では、自分でたてた問いを解決するために図鑑や事典などの図書資料やインターネットのサイトで調べる学習の機会をもつことが必要だと考えます。さらに、レポート形式で学習の跡を残しておけば、臨時休業期間とは異なり、直接アドバイスもできるため、まとめ方も向上する利点があります。

（画像1）
みつわっ子まなブック

### ポイント② 考えを書き出すことに力を入れよう

Withコロナでは、グループでの学習が制限されます。その分、「個人の考える力を鍛える機会を得た」と考え方を変えてみてはどうでしょうか。図3は体育学習（とび箱運動）の流れを示したものです。通常であれば、タブレット等の情報端末を用いてグループごとに動画撮影をするなど、対話的な学習場面を想定できますが、Withコロナでの現状では、どうしても個での技の習得時間を中心とした構成となります。そこで、まず動画（NHK for School）で技のポイントを理解する時間を設けた後は、おもに個人の練習時間に充てます。注目すべきは場の設定です。「開脚とび」と「かかえこみとび」の二つが練習できるように配慮しました。そのことで、自分のめあてに沿って場を選択し、練習に取り組むことができます。待っている子は一定の間隔をあけて座っているため、友だちの様子も観察しやすくなります。




（図2）学びの推進モデル

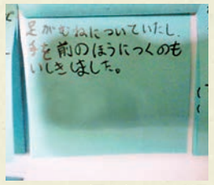
NHK for Schoolの体育のサイトでポイントチェック

間隔をとり，技の習得を意識した練習

ふせんによる振り返り

（図3）体育学習の流れ

そして気付いたことをふせんに書き出す時間を設けるのです（写真2）。小さいふせんだと書くことへの負担が少ないため、自分自身の気付きや友だちへのコメントも無理なく書き出すことができます。それをみんなの見えるところに貼り出すことで、主体的な練習へとつながり、その結果が「とぶことができた」という達成感につながるのです。



（写真2）ふせんの利用

（写真3）
風のはたらきを調べる実験

また、写真3は、理科の実験の様子です。牛乳パックとペットボトルキャップでつくった車に様々な帆をつけて、風による進み方を調べる実験をしました。その結果を整理したのが写真4のノートです。絵と図で自分の考えを書き出せています。ふせんのような手軽な手立ての積み重ねがこのようなノート記述につながっていると考えます。

（写真4）理科ノートへの記述

### ポイント③ ICTはできることから始めておくこと

Withコロナによって、一人一台端末の導入（GIGAスクール構想）が早まりました。でも同様です。ただ現時点では、本校は一人一台端末ではないので、臨時休業中には、双方向オンライン授業はできませんでした。ここで大切なことは、「みんなが持っていないからできない」というのではなく、「できることから始めよう」という発想の転換です。

そこで、写真5のようにコラボノート（ジェイアール四国コミュニケーションウエア）を利用した取り組みを進めました。使いたいときに利用できるソフトのメリットを生かし、子どもたちと先生、子どもと子どもの交流の場になりました。学校再開後の現在も継続的に用いることで、身近な交流ツールになっています。

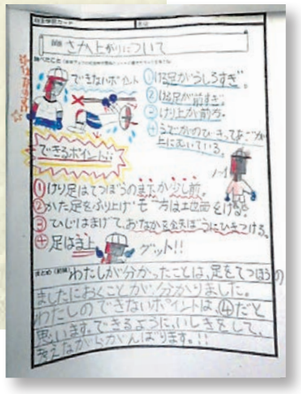
（写真5）コラボノートの記述

また、写真6が示すように、3年生の総合的な学習の時間に、Zoomを用いて大学の研究者と教室をつなぎ、アゲハチョウの学習を進めています。感染症拡大防止のため、ゲストティーチャーとしての来校が難しくても、工夫をすれば双方向のオンライン授業が可能になり、この機会が子どもたちの知的好奇心を高めていると実感しました。

まずは、子どもたちに身に付けさせたい事柄を吟味し、できることから始めることが、主体的な学びや学習習慣づくり、そして一人一台情報端末に向けた個別最適化学習につながるように思います。

（写真6）Zoomで専門家とともに

＼石堂先生の実践を公開中！／
ブログ「生き活きぅぃーくる」



（写真1）家庭での自主レポート

新しい生活様式と学び

# 保育所，幼稚園の現場から

富士見保育園

今回はコロナ禍の中，東京都立川市の「富士見保育園」はどのように考え、対応してきたのかを保幼小連携教育研究所の和田信行先生に紹介してもらいます。

## 富士見保育園

**所在地**　〒190-0013 立川市富士見町2-26-1
**電話**　042-522-2834（FAX　042-523-1231）
**園長**　野村 哲
**保育方針**　「豊かな人間性をもった心身ともに健康で たくましい子ども」の育成

### 入所定員

| | 0歳 | 1歳 | 2歳 | 3歳 | 4歳以上 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 定員人数 | 10 | 34 | 42 | 38 | 76 | 200 |

**保育所概要**
- 開所時間：7時30分～19時00分
- 保育実施年齢：生後5か月～5歳児
- 延長保育：あり

## 乳・幼児にはコロナ対策の理解と行動は難しい

### 自粛要請の中の保育所

このコロナ禍の中、社会福祉法人としての保育所は「保育でお困りの方のための施設ですから休園にすることはしない」というのが原則の考え方。立川市の方針も自粛のお願いという方針であった。その状況の中で、ライフラインに関わる仕事に従事している家庭以外には登園の自粛をお願いした結果、4月は登園を控える家庭が7割だったとのことである。

### 保育所でのコロナ対策の現実

①マスクは？　手洗いは？

年長組はマスクをして登園する子どももいるが、基本的に幼児にマスクは無理がある。活発に活動する幼児は、遊んでいるうちに息苦しくなって嫌がる傾向にある。手洗いに関しては特に気をつけて、外で遊んだ後や、おもちゃや絵本をさわる前後、トイレや食事の前後にこまめに行っている。

②ソーシャルディスタンス

子どもの遊びでは、どうしても子どもどうしの距離が近くなる。机やいすを離して配置しても、遊んでいるうちに友だちと近くで遊びだしてしまう。ソーシャルディスタンスが取れるのは、三輪車で遊んでいるときくらいである。

③昼寝や食事

自粛要請中は、3割ほどの登園であったので、食事や昼寝は密にならないようにソーシャルディスタンスに配慮することができた。通常（10割）の登園であったらそれもかなわないことになる。

園庭と入口の表示

④遊びは？

園児は遊びが生活の中心である。子どもたちにとって仲間がいない遊びは面白くないのである。一人が絵本を読んでいれば、周りの友だちものぞき込む。歌を歌えば元気な大声を出し、「小さな声で歌いましょう」といっても、楽しいと周りにつられて、どんどん大きな声になっていく。粘土で遊んでも、遊具で遊んでも、おままごと遊びをしてもやはり密になってしまう。基本的に子どもどうしの密は避けられないのである。

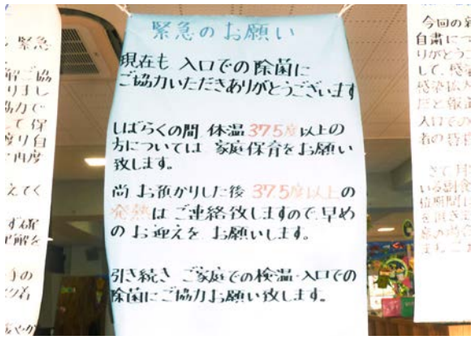
できるだけ広い場所で、机やいすの配置を工夫すること。遊具の消毒を小まめにすること。手洗いを小まめにすることに気をつけて乗り切ってきた。

机やいすの配置でも密を避ける

### 職員の努力で

学校以上に、保育所や幼稚園では職員が清掃や衛生に最大限の努力をしてきている。また、保護者も、コロナに対する危機感はもたれていたようで、園の方針や対応策に協力的であった。

小学校のように休園にできない事情や、子どものコロナに対する理解力や行動力が伴わない状況の中で、職員は常に子どもたちに目を配り、状況に対応してきた。小さな子どもを預かる保育所や幼稚園の職員は、精神的にも肉体的にも非常に厳しい状況をなんとか乗り越えてきた。少しでも収束へ向かうこと、ワクチン開発が一日もはやく進むことを祈らずにはいられない。



正面に掲示されていた「緊急のお願い」

## 和田信行（保幼小連携教育研究所所長）

東京都の公立小学校教諭経験後，都・区・市の教育委員会で行政経験。その後，新宿区の幼稚園長，小学校長を歴任。さらに，東京成徳短期大学教授，東京成徳大学特任教授を経て，現在保幼小連携教育研究所所長。
元全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会会長，生活科教科書編集委員（日本文教出版）等。著書，『わくわくドキドキカリキュラム』（小学館）他。

## 保幼小連携教育研究所

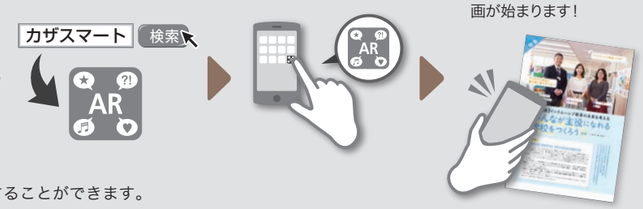
保育所・幼稚園・小学校等の連携・接続についての調査・研究を通して我が国の就学前と就学後の保育と教育の質的向上を図ることを目的としている。

**【主な事業】**
❶ 調査活動　❷ 研究活動　❸ 研修活動
❹ 講演活動　❺ 出版（普及・啓発）活動
モットー「保幼小の相互理解による連携・接続なくして，子どもの真の成長と学びの連続性はあり得ない」

## スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる！

1. スマートフォンまたはタブレットで，ストアアプリを起動します。
2. 「カザスマート」で検索し，アプリをダウンロード。
3. 「カザスマート」アプリを立ち上げます。
4. AR マークがあるページで誌面全体にかざすと，動画が始まります！

ANDROID APP ON Google play
Download on the App Store




★P.1–3（特集）で視聴できます。
※動画は，2020年12月31日まで視聴することができます。